

特集論文

「備え」から「手直し」へ

——コロナ禍における民族誌的諸研究とツーリズム

**From 'Preparation' to 'Reparation':
Ethnographic Studies and Tourism during the COVID-19 Pandemic**

土井 清美

中央学院大学 現代教養学部 准教授

Kiyomi DOI

Associate Professor, Faculty of Liberal Arts, Chuogakuin University

キーワード：新型コロナウイルス感染症、民族誌的研究、山岳ツーリズム、サンティアゴ徒歩巡礼、環境

Keywords: COVID-19, ethnographic studies, mountain tourism, Camino de Santiago, environment

- | | |
|------------------------|--------------------------------------|
| I. はじめに | IV. ツーリズムの文脈への敷衍 |
| II. 危機の日常化のなかで学びつつあること | 1. 山登りと山小屋 2022年 |
| 1. 「備え」 | 2. サンティアゴ徒歩巡礼 2020年～2022年 |
| 2. 介護・福祉現場 | V. 観光や環境の客体化を超えて |
| 3. 都会における行動制限と自粛生活 | VI. おわりにかえて——「生政治」の対象から外れるツーリズム関連従事者 |
| 4. オクラホマの大学講義室入口 | |
| III. レジリエンスと手直し | |

要約:

新型感染症流行の一因として環境問題が指摘されている。旅行およびその関連産業は、地球に大きな負荷を与え、今般の新型コロナウイルス感染症の地球規模の蔓延で強い打撃を被った。こうした状況にあって本論文では、環境や観光を客体化し、俯瞰し、展望する視座ではなく、人間が新型コロナウイルスのある環境に内在的に関与している事態はいかに特徴づけられるか、まず観光以外のコロナ禍の局面を捉えた複数の民族誌的記述分析を出発点に考える。そこからはコロナ禍を生きる人々の、問題の発生を未然に防ぐ「備え」から、取りまかれるものと衝突や対話しながら「手直し」する変化が見いだされる。これらの特徴を、コロナ禍にある山岳ツーリズムとスペインのサンティアゴ徒歩巡礼の民族誌的事例にあてはめ、どのような「備え」や「手直し」があるのか、レジリエンスとの差異を示しつつ明らかにする。最後に、2つの事例から明らかになるツーリズムという文脈ならではの課題を指摘する。環境とツーリズムの関係が問われている現在、足元から問い直すための研究視座こそが重要であることを、考察内容と議論の仕方の両面から提案する。

Abstract:

Environmental problems are contributing factors to the outbreak of new infectious diseases. Tourism and related industries place a heavy burden on the planet. As the tourism industry has been hit hard by the COVID-19, this study explored the multiple aspects of everyday life during the COVID-19 crisis, not with the purpose of objectifying and surveying the environment (particularly viruses) and tourism but for an ethnographic descriptive analysis. Moreover, it deals with how humans are intrinsically involved in the environment with COVID-19 in terms of concrete matters. Based on this understanding, this paper illustrates a shift from people using "preparation" to prevent problems to "reparation," as they negotiate and come into conflict with the environment. These characteristics are applicable to two ethnographic cases in tourism, namely, mountain tourism during the COVID-19 crisis and the pilgrimage on foot to Santiago (El Camino de Santiago) in Spain, in 2020 and the "Holy Years" respectively. These cases exemplify the kind of "preparation" and "reparation" that humans engage in and the difference between them from the concept of "resilience." This

paper highlights the challenges unique to the context of tourism revealed by studying these two cases. Moreover, the paper proposes that when the conventional relationships between the environment and tourism come into question, it is crucial to have a research perspective from the ground up, both in terms of the contents of the discussion and the development of the argument.

I. はじめに

2020年初春から世界中に蔓延した新型コロナウイルス感染症は、2022年現在もお収束していない。今世紀初頭から各国が観光政策を重視するようになり、さらに2010年以降は新興国の人々も多数旅行するようになったこともあり、今般のパンデミックで最も大きな打撃を受けた業界は旅行関連産業であるといつてよい。

多くの論者が指摘しているように、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の問題は、「ウイルスの問題」に限定されない。グローバリゼーション、人口の大量移動、航空網の発達、史上まれに見る人口の増加、巨大で密集した大都市への局地的人口集中、人間と動物の接触の仕方の変化が当該感染症の一因となり、世界規模の致命的な感染症の危機が今後増大するとも指摘されている (Jones et al., 2008; Christakis, 2020, p. 368)。

しかしながらこれらの問題は、感染症流行の前にツーリズムがおかれた状況のなかにすでに現れていた。2010年以降の旅行客の急激な増加と過剰な集中により近隣住民の生活や自然環境に多大な負荷がかかることが大きな問題となり、2010年代後半には世界各地で住民によるアンチツーリズム運動が巻き起こった (e.g. The Guardian, 2017)。また同じころ、航空機移動にともなう温室効果ガスの排出が気候変動を誘発することが問題となり、反フライト運動が広まった (Becken et al., 2021)。これに対応して航空業界は、森林再生プロジェクトを支援してカーボン・オフセットを進め、旅行代理業界は航空便ごとに温室効果ガス削減量を表示するなどし、新型感染症流行の素地としての環境問題は、情報開示を通じた業界リスクマネジメントの課題¹⁾へと回収されつつある。しかし文化人類学者・民俗学者の門田岳久が指摘するように、オーバーツーリズムへの反発には流行性があるが、そこに通底する問題は決して一過性のものではない²⁾ (門田, 2021)。今後旅行客数が回復し、従来の観光の仕方が再び幅をきかせるのであれば、加速する気候危機と新型感染症の断続的アウトブレイクのなかで、既存の関連産業は確実に衰退していきだろう。

観光研究のなかには、旅行業界は持続可能な観光のためにコロナ禍以前に観光を回復させることを目標とするのではなく、事業をダウンサイズし脱成長に向けて舵を

切らねばならないという議論も盛んにある (e.g. Butcher, 2021; Vogler, 2022)。筆者は、そうした旅行業界や観光研究における自然環境を配慮したガバナンスやマネジメントを推進する考え方に賛成である。他方で、次のようにも考える。その環境を配慮する好ましき観光への指針と、日々新型コロナウイルスの感染可能性に晒され移動や行動の規制や「自粛の要請」を経験した身体との間には、大きな隔たりがある、と。多くの人々にとって航空機による温室効果ガスの排出量は度量衡とともに示された数字でしかない。オーバーツーリズムの問題は出張先の宿泊施設の予約の取りにくさなどでしか経験されない。地球規模の新型感染症やそれを引き起こす「環境」をふまえたツーリズムのあるべき姿と、身体で直接経験される「環境」の間にあるこの距離をどう考えればよいのだろうか³⁾。

観光に関する制度設計も重要であると認めつつも、もう一つの方法として本論文では、ウイルスやその他諸々の具体的な環境に内在的に関与する人々へと視線を落とすことを提案したい。具体的には、(日本では)3年超におよぶコロナ禍という危機の日常化のなかで私たちが何を経験し、学びつつあるのか、観光以外のコロナ禍の日常的な局面に光をあてたいいくつかの民族誌的分析を、「備え」概念と「手直し」という語で特徴づける。「備え」とは事態の発生を未然に防ぎ、経験せぬ状態を存続させる営為であり、「手直し」は経験を起点に次の出来事を引き起こす営為——それは必ずしも生存や持続を志向するものではない——である。両語はそれぞれ、災禍の事前と事後の対応と交換可能のようにみえるが、本論文では、それらを未知性ないし不確実性をはらんだ時空間への態度の差異として示す。それぞれの語に輪郭を与えるため、「レジリエンス」概念と「手直し」の差異についても述べる。「備え」と「レジリエンス」は共に、未来や過去を重視し、設定した目標を有効にするために現在の行動を決める態度であるのに対し、「手直し」には衝動ともいえる現在の前景化が認められる。

次に、上記の理論的理解を、コロナ禍にある北アルプス山岳ツーリズムと、2020から2022年のスペインにあるサンティアゴ徒歩巡礼の2つの事例に当てはめて記述分析する。最後に、当該2事例を起点に、ツーリズムの脈絡ならではの今後検討すべき課題を指摘する。

新型コロナウイルス感染症は現在もお流行してお

り、得られた文献も網羅的ではなく多分に偶発的である。議論の構成もまた、論証的というよりも探索的なものである。だが、ウィズ／ポストコロナ時代の観光動向の展望ではなく、新型コロナウイルスが蔓延する時空間における生を出発点に、旅行のあり方——それは単なる消費や余暇の一様式だけでなく、地上を移動するひとつの存在様式でもある——を足元から問い直すうえで、そうした手探りの議論も無益ではないと思われる。

II. 危機の日常化のなかで学びつつあること

1. 「備え」

まず、新型コロナウイルス感染症のパンデミックを考える際に示唆に富むゆえに、鳥インフルエンザの防疫に関する2000年代初頭の民族誌への言及から始めたい。フレデリック・ケック (Keck, 2010) は、SARSと鳥インフルエンザが2度アウトブレイクした香港と中国を中心に世界各地で人類学的調査を行い、各地域で見いだされる共通した特徴を「備え」の概念で整理した。軍事分野で用いていたバイオセキュリティに関する措置を保健分野に移転するなかで生じるようになった「備え」は、感染した家禽を殺処分したり、人への感染を防いだりすることとは異なる。行政や医師、畜産業者、獣医、微生物学者ら専門家 (エキスパート) らが、まだ見ぬ新興感染症などの次なる危機に対して想像力を駆使し、「あたかも破局が現に現れているかのように振る舞う」 (Keck, 2010/2017 小林訳 p. 41) 諸実践の総体である。「備え」とは事態の発生を未然に防ぎ、経験せぬ状態を存続させる営為である。すでに発生しているのだと想像しながら遂行される安全対策上の分業であり、集団で高度な監視体制と殺処分を交互に行うことで、次なるパンデミックに対する不安や危機の発生を未然に抑え込む。

興味深いことに、それから10年以上が経過した現在、新型コロナウイルス感染症の世界的流行が始まった頃の私たちの生活に目を転じると、程度の差こそあれ、「備え」が専門家の分業に限定されないこともわかる。不確定で混乱した状況が続くパーマクライシス (permacrisis) への慣れが見られるも、検温や過去2週間の行動の確認、解熱剤の需要高、(日本における路上や公共の場での) マスク着用、ワクチン接種の意思決定などからは、感染を防ぐことのみならず、何ごとかの事態の発生を未然に防ぎ、経験せぬ状態を存続させようとする営為がうかがえる。しかしながら、人々の生活様式はパンデミックを契機として、多岐にわたる「備え」へと開かれていった

のだろうか。そのことを詳らかにするために、次節ではコロナ禍における諸局面に光を当てたいいくつかの民族誌的記述を取り上げたい。

2. 介護・福祉現場

医療現場よりも介護・福祉現場のほうがケアと感染予防を両立することが困難であることはあまり知られていない。新型コロナウイルス感染症流行の初期に国内外の多数の介護・福祉施設でクラスター感染が発生し死者が出た。その理由を介護・福祉の現場で感染対策の知識や技術、危機感が欠如しているからと考えがちだが、コロナ禍の介護現場へ医療支援に入った奥知久によれば、その見方は必ずしも正しくないという。

介護従事者は利用者の食事や入浴の介助をし、認知症のケア施設では利用者のマスク着用すら望めない。対人距離の確保も標準的な感染予防マニュアルも通用しない。さらに介護・福祉施設と一口で言っても、看護師が常駐する特別養護老人ホームでは物品の安定確保が困難であるのに対し、小規模のグループホームでは感染予防の情報が入りにくいという違いがある。そうしたなか、感染専門ではない医師は介護従事者とともに入浴介助時に簡易マスクを着用したり、防護具の代わりの雨ガッパを後ろ前にしフードを内側に織り込んで着たりするなど工夫し、現場固有の対策をしだいに編み出していった。奥は「実験と学習を通じて新型コロナウイルス感染症流行によって脅かされた世界で秩序を少しずつ再構築していく過程それ自体が、安心をうみだしていくのである」 (奥・島藺, 2021, p. 331) と述べる。徹底した感染対策によって安心を得るのではなく、危機に晒されつつあることを学び行動していく中で安心が醸成されると主張する。

反復的行為もまた介護を継続するうえで必要だったという。特に感染防護具の着脱練習は置かれた環境でできることをやるのが「不確かな世界の中で秩序を回復させるための儀礼」であった (奥・島藺, 2021, p. 321)。感染症学という鳥瞰的な位置から最適解をデザインする近代知に対し、奥はレヴィ＝ストロースのアイデアを援用し「野生の思考」と特徴づけた。「野生の思考」に時間性を含めつつ換言するならば、それは次の一手を積み重ね、目的ではなく過程としての安心を得る「手直し」とも言うだろう。

3. 都会における行動制限、自粛生活による変化

新型コロナウイルス感染症の流行では、病気に罹って

いる人も雇っていない人も等しく病気の影響を受ける。人類学者の北川真紀は、「ステイホーム」の掛け声とともに移動制限を要請されることになった都市型の日常生活の変化について民族誌的に記述分析し、ケックの「備え」と対比している。都内に通勤していたが在宅勤務になり、2年間住んでいて初めて出たベランダで野菜を育て始めたIさんは次のように述べる。

動きとかってないんですよ、家にいて仕事して飯食ってとかだと。だから、鳥は雛から成長するのは1、2か月かかるんですけど、毎日変わるじゃないですか。あと木もどんどん大きくなる。だからなんか身近なところで動きがあるものを求めている気がしますね。植物とか生き物とか。「太陽当たってないから大きくなってないな」とか「水あげすぎたから枯れた」とか、結構自分の感覚で調整してたんですよ。で、圧倒的に、なんでマンションで成長しないのかっていうと、もう太陽。太陽が少ない。めっちゃ太陽があたるところに行きたいと思っていました。

Iさんへのオンラインインタビュー（北川, 2021, p. 157）

Iさんは家庭菜園を始めてから、上手に育てられなくなり、バジルの葉と太陽とマンションの立地の関係に気づいた。またIさんの妻は、在宅勤務になって孤独感が高まり、体調が悪くなったためペットとして文鳥を飼い始め、それをきっかけに鳥について調べるようになった。さらに車を購入し、双眼鏡をもって家の周辺や隣県の山に鳥を見に行くようにもなった。「これまで身体が会社や遠くの観光地などと点を結ぶようにして存在していたあり方は、解体（disassembling）され、立ち現れたのは複数種が住む街の環境だった」（北川, 2021, p. 158）。コロナ禍は、通勤や仕事での交流の時間を奪い、動きがなくなったIさんたちを意気消沈させただけでなく、その後の欠陥や失敗を経て経験したことのない生を編み直す契機となった。北川は都市生活者の事例をトラブルや失敗などに傷つきながら修繕、再編する運動であると述べる。換言すれば、現在を未来に従属させる「備え」ではなく、限られた範囲の資源や動きに自らの意識や行為を合わせ、関わるものとの調整をし合う「手直し」ともいえる。

4. オクラホマの大学講義室入口

新型コロナウイルスによる多数の死者が出た2020年と2021年、アメリカにおけるコロナウイルスへの態度が非常に政治的かつ二極的であったことはよく知られて

いる。これについては、人類学者キャロリン・ラウズが、ロックダウン（都市封鎖）命令に反対するデモの、白人と黒人それぞれが持つプラカードの内容の差異を指摘している（Rouse, 2021）。白人がゴルフや美容院といった楽しみが奪われることに抵抗していたのに対し、経済的理由から医療保険に未加入の比率が高く、対面接客を伴う業務に就く割合が高い黒人などのマイノリティは、ロックダウンがおよぼす経済的困窮を訴えていた。ラウズはこの問題を、生政治の対象とそうではない対象を集め合つかつ即物的に選別し、排除し、生の一部を壊死させ、やがて死に追いやる社会・政治的作用、すなわち「壊死政治（necropolitics）」（Mbembe, 2008）と特徴づけた。

2021年にアメリカに滞在した人類学者の澤野美智子は、このアイデアをもとにコロナ禍で滞在したオクラホマの大学の様子を民族誌的に記述分析した。大学寮入寮の際、髄膜炎ワクチンの接種義務はあるものの、コロナワクチンの接種の規程はなかった。また、構内で開催されるフェスティバルやトレーニングセンターでもマスク着用の人はおらず、澤野は「まるで存在しないウイルスの妄想に自分だけが取りつかれているよう」（澤野, 2022）に感じたという。大学では教員によってはシラバスで授業中のマスク着用を明記し、教室でティーチングアシスタントにマスクを配らせ学生に着用させるのに対し、受講生は授業が終わり教室を出た途端にマスクを外し、階段には無数の使用済みのマスクが捨てられていた。

髄膜炎ワクチンへの厳格な規定が残っていることから、かつては「備え」の姿勢があったことが推測される。しかし新型コロナウイルス感染症に関しては、（マスクをしている人は民主党支持といった具合に）ウイルスへの態度が政治的文脈に置き直される（澤野, 2022）などして、「備え」は重視されなくなった。科学的知識に依拠して感染を避ける行動を取るのではなく、他者の求めにその都度応じる「手直し」の所作がここでも見られる。

III. レジリエンスとの差異

ここまで、全く異なる場面における、新型コロナウイルス感染症に罹患する危機の日常化を、民族誌的記述分析を通して眺めてきた。興味深いことに、コロナ禍の中で彼らがとった行動に通底するのは、鳥インフルエンザについてケックが概念化した「備え」、すなわち未来を現在に従属させたり自己や状態を持続させることなく、身のまわりに現れるものに都度注意を払い、それらとの衝突や対話から行為を修正することである。

「備え」と「手直し」を出来事の前後（あるいは最中）としてではなく、未知性ないし不確実性をはらんだ時間への態度という相から論じるために、ここで「手直し」と、近年注目されているレジリエンス概念との差異を明らかにしておきたい。レジリエンスとは、辞書的には弾力、復元力、回復力を含意する。レジリエンス(resilience)という語を用いた学術論文を眺めると、生存に直接関わるような強度の高い瞬間的な打撃が諸議論の前提にあり、そこではレジリエンスを「唐突な衝撃の発生時に機能する複雑なシステム」(Özden-Schilling, 2022, p. 1)や「危機や脅威を回避するのではなく、そこから学習し善く生きる主体性」(Evans and Reid, 2014)としている。しかし3年におよぶコロナ禍や今後断続的に発生しうる新型コロナウイルスのアウトブレイクは、突発的な変化ではなく、長期におよぶ危機という点で状況が異なる。これについて一部の観光研究では、あらゆる局面で予測不可能性が高まる今日、突発的な事象だけでなく地球温暖化や土壌汚染など徐々に変化してゆく事象への対応もレジリエンス概念に組み込むよう論じているものもある⁴⁾ (e.g. Lew and Cheer, 2017)。しかしながら、こうしたレジリエンスという語を用いた議論の一次近似として挙げられるのは、変容を伴いながらシステムを存続させることや、属性ごとに分けて統治するための大観的デザインを目指すものであり、人的社会的ネットワークを(再)構築するための能力を称揚するものである。予測不可能な事態に陥ってもレジリエントであるよう日頃から準備すべきという論調からは、「備え」のラディカルな一様態が垣間見える。災禍の経験の前後という相違はあれど、「備え」と「レジリエンス」は共に、設定した目標を有効にするために現在の行動を決める態度である。

これに対し「手直し」には、衝動ともいいうる現在の前景化が認められる。ここまでのいくつかの民族誌的事例から明らかになったのは、危機が日常化した状況において都度の出来事と衝突したりトラブルに対応したりしながらその場をしのぐ仕方、身のまわりの状況に注意を払い、発見から行為を修正する「手直し」であった。とりわけ介護現場やスポーツジムでマスクの着用をしない、新型コロナウイルス蔓延時に鳥を飼うといったことは、危機への慣れ、生存や持続を志向するものではないことの証左である点において、レジリエンスとは明確に異質である。

IV. ツーリズムの文脈への敷衍

フィールドワークに基づく人類学を開拓したブロニスワフ・マリノフスキは、その著書『西太平洋の遠洋航海者』の序論で、宗教や技術、社会組織だけを人工的に切り取るのではなく、日常的なものの奇妙なものを含むあらゆる側面を研究すべきであると述べている(Malinowski, 1922)。『贈与論』で知られるフランスの人類学者マルセル・モースもまた、一つの社会現象は宗教や経済、法、芸術といった領域固有のものではなく、複数の社会的行為が折り重なっていると述べる。モースによる「全体的人間」(Mauss, 1950)というアイデアは客体化された制度や集合的局面のみならず、生理的でもあり社会的でもある身体にも注がれている。実際に旅行する身体は介護に携わる身体でもあり、菜園を手入れする身体でもあり、大学に出かける身体でもある。そうであるならば、ここまで見てきた「備え」から「手直し」へという特質は、ツーリズムの諸局面と切り離されてはいないと考えるのが妥当であろう。

観光人類学者の橋本和也は、観光と旅を次のように明快地に区別し、今後、後者が重要になると指摘している。「大衆観光の大きな特徴は『よく知られたものを確認する』ための移動であり、あらたな『発見』を目的とするのは『旅』である」(橋本, 2022, p. 3)。これは、自己やシステム、コミュニティの存続を召喚する「備え」としての観光実践と、見慣れぬものや不慣れなものと実際に関わってゆく過程で自らの行為を「手直し」する旅の実践とも読み替えられうる。旅行業はもとより、宿泊施設や交通機関、旅行出版社、宿泊予約サイトなどこれまでの旅行関連産業は、見知らぬ訪問地で生じうる不安や不便、安全の脅威を低減するサービスを提供することを通して発展してきた(Williams & Baláž, 2015)。消費者と旅行商品の販売者、あるいは各旅行関連セクター間にある情報の不均衡にともなうリスク回避志向は、観光業界では商機にもなってきた。危険や困難、およびそれに伴う興奮を求めてガイド付きの冒険ツーリズムが近年隆盛していることとも無関係ではない。旅行関連産業や前述の橋本(2022)が指摘する「大衆観光」は、人類学者の市野澤の言葉を借りれば、危険の源泉となる敵を析出して排除するセキュリティ思考(市野澤, 2018)に支えられてきたとも言える⁵⁾。では、コロナ禍を契機にいかなる「手直し」がツーリズムの文脈で表出してきたのだろうか。以下では、コロナ禍における介護の仕事や都市型生活や大学生活と跨るようにしてツーリズムの領

域にもある「手直し」と特徴づけられうる諸局面を、民族誌的事例検討を通じて浮き彫りにする。

1. 山登りと山小屋 2022年

登山やトレッキングは、登頂を目指すアウトドアレジャーとみなされがちだが、長野県観光課のデータによれば、登頂よりも自然を楽しむことを目的とした回答が約76%、景色を楽しむとの回答が約60%と登頂目的よりも明らかに多く（長野県山岳高原観光課, 2014）、まさにツーリズムの範疇であると言える。なかでも日本アルプス（飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈）などの3千メートル級の高峰を抱える山岳地帯では、展望レストランやシャワー、数百人が宿泊可能な山小屋や、 Gondola やロープウェイが設置されていることもあり、夏場になると、登山経験の少ない個人や、ガイドに先導されたツアー客が大挙して押し寄せる。北アルプスや八ヶ岳連峰など日本を代表する山岳を有する長野県では、毎年来訪する50～70万人の登山者のうち約8割が県外在住者である⁶⁾。以下は、筆者が2022年7月から8月にかけて行った電話とメールおよび現地調査に基づく民族誌的な記述分析であり、特定の時期と場所に依拠した「手直し」のあり方を提示することになる。

日本アルプスのなかでも富山県、岐阜県、長野県、新潟県の4県にまたがる飛騨山脈、通称北アルプスは、「百名山」を15座擁し、貴重な動植物が生息、生育し、数百人を収容する設備の整った山小屋も多く、特に登山者の間で人気が高い。

コロナ禍3年目の2022年、高山植物の花期にあたる7月下旬から8月は新型コロナウイルス感染症の第7波とよばれる感染急拡大と重なった。白馬連峰では、県の山岳遭難防止対策協議会のメンバーが登山口にコーンを置き、山に登ろうとする登山者4、5人ごとに集め、通せんぼうをするように立ち、出発前の登山者に次のことを伝えてから道を通すことを繰り返していた。

この先、複数の従業員が新型コロナに感染して休業することになった山小屋がいくつもあります。山小屋がいくつも休業になったために通行止めになっているルートもあります。スタッフは入山前に検査をして陰性を確認してから山小屋に入っている所以他们は感染源ではありません。コロナは登山者のみなさんが持ち込んだものです。ですから皆さん、少しでも体調に異変がある場合は登らないでください。山に入ったらコロナだからという理由で救援はできません。山小屋ではマスクをしてください。皆さんのちょっ

とした心がけで気持ちよく登山できる環境づくりにご協力ください。

山岳遭難防止対策協会と記された赤いチョッキを着た人が1、2分話している最中に、足止めされた一人が、日帰りなんです山小屋には泊まりません、と言いながら振り切って進もうとしたところ、赤いチョッキ姿の人は彼女の行く手を遮るように、少しですから慌てずに聞いてください、と返した。長野県観光部によれば、主要な登山口で通りがかった少人数の登山者を集めては上記の話を伝えているという。それを聞いてやはり体調が悪いからと踵を返す人はいないが、感染者が増えて山小屋が休業すると、荒天時にテントを設営できない登山初心者やテントを持たない登山者が露営することになり、結果的に遭難件数が増えるので、登山者の啓発目的に声がけをしているという。

実際に従業員が集団感染し、休業を余儀なくされた山小屋が2022年8月20日時点で13軒以上あった。多数の山小屋の従業員の陽性が確認された直後に休業することになった場合でも、通信状況が悪いため、すでに山の中を移動中の登山者の携帯電話に連絡するのは容易ではない。県山岳遭難防止対策協会常駐隊の隊員らが登山道を行き来して登山中の人々に山小屋の休業を知らせた。多くの個人の登山者は、予定していた宿泊先をさらに数キロ先——地形によっては数時間かかる——に変更したり、ルートを変えたりしたほか、複数のガイドツアーが中止となり、体力的、時間的に限界と見なされた登山客だけが泊まることになった。営業再開後も宿泊定員を半分に減らし、現在も利用者数の平準化を目的に平日と休日で宿泊料金を変えるなど試行錯誤を続けている。

北アルプスには1906年一般向けに開かれた日本最初でなおかつ日本最大の山小屋、白馬山荘（標高2800m）がある。この運営会社の担当者に話を聞くと、燕山、湊沢ヒュッテ、蓮華温泉、雷鳥荘、室堂山荘、穂高岳山荘、常念…と次々と休業になった山小屋の名前を語ったあと、次のように語った。

白馬山荘の12日間の休業で1500万円（の損失）。8月の上旬は花もきれいに咲きそろっている一番いい時なのに。元気に小屋に到着して夜に発熱して、コロナっぽくてもへりに乗せて下ろすわけにいかないんですよ。一晩居てもらって、解熱剤を飲ませて自力で（1500mの高低差を）降りてもらえない。発熱した登山者に付き添う常駐隊も次々と感染して救援活動もまわらなくなってる。宿泊定員

を減らして、消毒に検温、マスクにアクリル板にと感染に注意していても、山小屋のスタッフは相部屋しかないから一人がうつるとすぐに広がっちゃう。予約してくれた何百人に電話して休業のことを伝えと、キャンセルする飛行機代を出せ、ツアー代を出せと怒る人もいて。

白馬山荘の運営会社の従業員の語り

山小屋事業は山開き（小屋開き）している7～10月に集中する。時期が著しく限定される業態ならではの問題もある。2022年現在、新型コロナウイルス感染症患者は軽症の場合には入院できないが、夏の山小屋のスタッフは全国から来るため、山小屋で陽性が判明したスタッフを公共交通機関を使って帰宅させるわけにもいかず、だからといって長野県の宿泊施設はどこも満室なため、感染したスタッフが下山した後、会社がその社員寮で彼らの食事等の世話をすることになった。世話をしていたスタッフも感染したという。

感染対策においても、気象的、地形的要因によって望ましい対応をとれない状況もある。山では道中マスクを着用しなくてよいという暗黙の了解が国内の登山者のあいだで浸透しており、そのままマスクをしないで小屋に入ってくる登山者も少なくない。もちろん山小屋で働く人たちは感染予防には換気が不可欠であることを知っているが、斜面にぶつかった空気が山岳地形により上昇し、標高の高い山小屋では濃い霧がかかることが多く、窓を開けると室内が濡れ建物が傷んでしまうので窓を開けることもままならない。

マスク不着用の暗黙の了解は長らく続いてきた他の慣習を変えることになった。山で人とすれ違う際には「こんにちは」と挨拶する慣例があるが、ある登山者はコロナ禍が始まってからは、人の往来の多いアルプスでは他の登山者とすれ違ってても挨拶しなくなったという。自分を守るためだけでなく、すれ違いざまの挨拶時に自分がウイルスをまき散らす可能性を考えると声を出すことに抵抗があると語る。また別の登山者は「以前の山小屋は避難する場所だったのに、今は感染する拠点みたいになっている」と語り、テント泊に切り替えたという。実際、コロナ禍を機にテント持参の山行が増加している。

山登りは一般に、サービスや技術が高度に発達した都会生活と対照的な素朴な自然環境に身を置く印象を与えがちだが、そうではない。ウェブ上で登山届を提出したり、電波の届かない場所でも山のルートや危険情報をアプリ上で共有できたり、事前に登録してある特定のユーザーにGPSの位置情報を通知できる環境にある。また、

これらの情報が実際に遭難時の救助活動に役立てられており、山登りは情報技術が駆使された環境のなかで行われる。その意味では専門家(エキスパート)が開発した「備え」が薄く広く浸透しているといえる。また、遭難時の救援拠点であり登山道の維持管理やバイオトイレの設置管理の機能をもつ山小屋営業も、登山者の尿尿による環境負荷を軽減するソフトな「備え」あるいはレジリエントなシステムとなっている。地域によっては登山禁止や登山届の未提出者への罰金を科す条例があるところもあるが、長野県では2013年に入山規制が検討されながら、隣県の登山口からも入山ができること、山菜取りとの区別が困難であること、入山「自粛要請」のほうが「規制」よりも実効性があるとして2022年までのところ入山規制は導入されていない。こうした行政による自粛要請または規制の検討プロセスそれ自体、結果的に新型コロナウイルス感染症の蔓延時に「禁止」ではなく「自粛」で対応する備えとなっていた。

2020年と2021年には全ての山小屋営業の休止と入山自粛要請が呼びかけられたが、2022年に自粛要請はなかった。山小屋は感染の危機に晒されながら営業を続け、複数の感染者が出た場合は体調不良の来訪者を受け入れる例外を除けば休業し、登山者らは山行スケジュールや宿泊方法を変更するなど、山中では都度の「手直し」が行われていた。

この手直しはこの先経営的に奏功するのだろうか。2022年夏現在までのところ宿泊定員を抑制し、感染したスタッフのケアや休業といった新型コロナウイルスによる影響の長期化と、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で加速した物価上昇など複合的な要因により、山小屋経営の不採算は続いている。しかし山小屋が廃業すると、登山道の整備やトイレの維持管理、救助活動がされなくなることを意味し、遭難者数の増加に直結する。そのため今後は県からの山小屋公益的機能維持等支援金や環境協力金徴収の強化、クラウドファンディングなどの方法で山小屋の営業継続となるかもしれないと長野県山岳高原観光課の職員は言う。

2. サンティアゴ徒歩巡礼 2020～2022年

イベリア半島各地から北西部のサンティアゴ・デ・コンポステラへと集まる歴史的な巡礼路では、20世紀末以来、歩いてサンティアゴ大聖堂を目指す巡礼が国際的に人気である。今日その動機は必ずしも宗教的なものではなく、景観を楽しんだり、見知らぬ土地を900km近く踏破する約40日間の冒険であったり、他者と出会う機会で

あったりなど、ゴールをめざす個別の徒歩旅行プロジェクトとも言う。21世紀に入り、その人気はさらに加速的に高まり、サンティアゴ大聖堂から100kmの距離を歩いた証明書の授与件数だけでも約20年の間に10数万人から3倍に膨れ上がった。実際に巡礼路を歩いている人の数は巡礼事務所が公表する件数の10倍ともいわれる。徒歩巡礼者の多くはアルベルゲ (*albergue*) とよばれるドミトリー式の巡礼宿に泊まりながらサンティアゴを目指すのだが、2010年代には、観光シーズンになると、道中の村や町における宿泊希望の巡礼者数が宿泊ベッド数を超え、道沿いの住民の生活を脅かすことが沿道の市町村 (ムニシピオ *municipio*) 行政や巡礼宿、住民、巡礼愛好会アソシエーションの間で大きな問題となっていた⁷⁾。

サンティアゴ巡礼路を訪れたりそこに居住したりする人々にとって今般の疫病に対する印象は、スペイン国内の新型コロナウイルス感染者数の統計的推移や日本におけるコロナ禍での行動と大きく異なる。マドリッドや巡礼路がある北部の町 (レオン、アストルガ、サンティアゴ・デ・コンポステラ) の住民や徒歩巡礼者への聴き取りをまとめると、新型コロナウイルス感染症による死亡者が多数出た2020年の春は国全体がパニックに陥っていたが、2021年には感染に対する恐怖や行動規制はかなり減少し、2022年はコロナ前の日常を取り戻しているようである。2022年9月現在では、交通機関利用時のみマスク着用義務が定められ、移動規制などはない。

2020年春、スペイン国内を走る総延長数千キロの巡礼路沿いの全てのサンティアゴ巡礼宿、宿泊施設、教会、大聖堂が閉鎖した。歴史家のカウッチ・フォン・サウケンによれば、過去に戦争や疫病の流行による巡礼路の部分的封鎖はあったものの、一斉閉鎖は巡礼史上初めてだという (Caucci von Saucken, 2021)。屋内外問わず公共空間におけるマスクの不着用や行動規制区域における通行許可のない移動は取り締まりの対象となり、罰金が課され、スペイン国民の多くはそれに従った。徒歩巡礼を計画していた人々の多くは計画を延期し、写真や地図を部屋の壁に張って眺めつつ、SNSやオンライン上のサンティアゴ巡礼コミュニティで積極的に交流していた⁸⁾。これらはすべて、医療や行政の高度な専門組織化や情報通信技術の発達が可能にしたといえる。ケックが記したほどの禍々しさはないものの、専門家集団や各サービス提供者による「備え」がパンデミック⁹⁾ 初期に浸透していた。

2020年7月には巡礼宿が開き始めた。ゴールのサンティアゴ・デ・コンポステラが位置するガリシア州の

住民に2020年の巡礼路の状況を聞くと、巡礼路を歩く人の多くは、日々多数の感染者や死者がいるにもかかわらず、自分の健康や体力に自信があり新型コロナウイルスを恐れない向こう見ずの若者や中年のスペイン人ばかりだったと語る。しかし、様々な地域でロックダウン (*confinamiento*) が敷かれるなか、マドリッドの自宅に帰らずに4月末まで歩き続けた巡礼者の話に耳を傾けると、電話越しに聞くマドリッドの人々は、身体的距離を保つ、マスクをする、手を洗うことをせず、彼は恐ろしく感じてなかなか戻れなかったという。その頃歩く人の数が減った巡礼路では、知らぬ者同士あまり関わり合わず、マスクを着け、手を洗い、互いに距離をとって歩いていた。実際に帰宅した後も、巡礼路のほうが安全で、街にいるほうが怖かったと述べる。また、その頃には電波が届かなくてもGPSで現在位置と巡礼路の地図上の位置関係を確認できる徒歩巡礼マップガイドアプリが普及し始め、人に道をたずねたり定められた道を大きく外れたりすることなく歩くようになっていた。

しかし反対にそうした「備え」の構えは、スペインの自治州分権が進んだ行政や、スマートフォンを利用した情報通信技術の進展ゆえに定着することはなかった。自治州ごとにマスク着用義務の規定が異なるなか、複数の自治州を横断しながら歩く巡礼者は、現在自分がいる地点が属する州を常に正確に把握してマスクの着脱をしていたわけではなかった。また、巡礼路の宿泊施設が一斉に閉鎖された後、自宅に戻ることもできず泊る場所もない、さらには感染しているかもしれない徒歩巡礼者は、いくつかの巡礼宿に例外的に受け入れられていた。巡礼宿はレフヒオ (*refugio*) とよばれ、巡礼が隆盛した中世に巡礼支援を企図して整備されたインフラストラクチャーのひとつである。寝泊りできる場所がある限り、移動規制の取り締まりにあわない限り、巡礼路を歩き進むことができた。

2020年7月に最初の巡礼宿が再開され、以後次々と巡礼宿やホテルが営業の再開を始めた。推測だが、おそらく「聖年」の2021年3月には、経営立て直しの見通しがたった宿泊施設、商店、交通、ツアー会社など旅行関連産業が多くあった可能性が高い。なぜなら、聖ヤコブの日である7月25日が日曜日に当たる年は、「聖年 (*año santo jacobeo* または *Xcobeo*)」とよばれ、例年よりも数万人多くの人々がサンティアゴ大聖堂を訪れ、各地でさまざまな祝祭イベントが開かれるからである。ローマ教皇は、パンデミックが続いているため、また混雑を軽減するためとして、聖年を2021年だけでなく2022年の両年



図1 サンティアゴ・デ・コンポステラに來た徒歩巡礼者ら¹⁰⁾

(2021年 Rosa Vázquez撮影)

に例外的に延長した。実際、2021年に発行された巡礼証明書は178912件であり、この数は、徒歩巡礼者が急増した2005年から2009年にかけての毎年の発行数よりも多く、サンティアゴ徒歩巡礼の「オーバーツーリズム」が問題になり始めた2010年代並みの数である。

ローマ・カトリック教会による聖年の指定は、奇しくもサンティアゴ巡礼に関連する産業の経済的展望に光を与えるきっかけとなり、聖年の延長宣言は、サンティアゴを訪問する人々の——信仰の篤い人は飛行機や鉄道、バスなどを利用してサンティアゴへ直行するのに対し、比較的宗教に関心のない人が歩いて巡礼するとされる——の参集を分散し、パンデミックにより大きな打撃を受けたツーリズム関連事業者に、少なくとも2年間の事業継続の方途を示した。全容がわからない現段階において、このことをレジリエンスであると言い切るのは尚早である。だが、すでにいくつかの論考では、ローマ教皇の指示による聖年の延長の告知が、打撃を受けたサンティアゴ巡礼に関連する旅行産業の起爆剤になったという考察がなされており（e.g. Mosquera and Galindo, 2021）、レジリエンス概念に含意される統治の力学や効果的な制度設計による経済の改善を裏付けている。

では「手直し」はどのような局面で見られるだろうか。その際には過去のサンティアゴ徒歩巡礼の民族誌が参考になる。飛行機や列車などを使わずあえて歩く人々が増加した1998年に刊行された民族誌（Frey, 1998）においても、よりグローバル化した2015年に記された民

族誌（土井, 2015）においても見られたいくつかの共通性があった。そこでは、重いザックを背負い、足に炎症を起こし、道に迷い、道中で会った人と一緒に食事を作り、不思議な経験をし、低予算で済むと記されており、それらの身体経験が、人や事物など他なる存在との直接的な関係と、巡礼者間の連帯性と、目的地までの圧倒的な遠さの堪能を生み出すと特徴づけられていた。しかしその特徴はコロナ禍が決定的な契機となって大きく変化した。

数十もの2段ベッドからなるドミトリー形式の巡礼宿が敬遠された結果、この2年間でドミトリーをツインルームの個室へと改築する私営の巡礼宿が急増した。宿泊形態の変化は巡礼スタイルの変化を誘引した。1泊（1床）10€前後（公営や教区運営の場合、宿泊代はなく寄付式なので、もっと安くなる）のドミトリー式巡礼宿に40日間泊まっても400€だが、1泊（1室）30€前後の個室のある宿（巡礼宿、オスタル）に400€の予算で泊まると13日間しか歩き進むことができない。したがって共同寝室ではない宿泊施設への指向とともに、一度に数百キロを歩くのではなく、短い距離だけ歩いて帰宅したり、最後の100kmだけを歩く人が増加した。大きな荷物は荷運びサービスによって次の宿泊予定の宿まで運搬され、歩く際の手荷物は大幅に軽量化された。お互いに助け合わなくてもほぼ確実に次の宿に到達でき、方向感覚なしに「遠さ」がアプリ上の距離の数値として把握されるようになった。コロナ禍を契機に、感染しない、怪我をしな

いサンティアゴへの歩き方が、少しずつ浸透しつつある。サンティアゴ巡礼を専門に執筆するジャーナリストのアントン・ボンボによれば、個室宿泊施設の選好は日中は見知らぬ者と知り合う機会を得たいが、寝る時には快適で親密な空間を確保したいという指向の現われであり、パンデミックを機に不可逆的な変化となると予測している（Pombo, 2021）。

パンデミックをきっかけに、コロナ禍でもあえて歩く巡礼者の指向は、巡礼宿の間取りを変えるかたちで顕在化し、それが徒歩巡礼のスタイルを変え、以前にあった徒歩巡礼の特徴、すなわち他なる存在との直接的な関係や巡礼者間の連帯性、「遠さ」の堪能というものを減衰させた。他方で巡礼路の保全に関わる諸組織は、人の移動を制限し巡礼路における感染を未然に防ぐ活動とは反対の企てをしている。聖年である2021年と2022年の春から秋にかけて、増改築工事中の巡礼宿がいくつもあり、個室宿泊施設にもドミトリー式にも泊まることができない徒歩巡礼者が多く出た。彼らの多くは、ピレネー山脈付近やそれ以東の自宅などから900km以上を歩く人たちである。こうした「長距離」の徒歩巡礼は、サンティアゴ教会が巡礼証明書を受け取ることができる要件である最後の100kmを歩く「軽薄な」巡礼に対立するものとして、サンティアゴ巡礼愛好会や巡礼宿のボランティアソシエーション、サンティアゴ財団といった巡礼路の文化・社会的環境を保全する各組織から重んじられており、ドミトリー式の巡礼宿において「長距離」徒歩巡礼者のためにベッドを空けておく動きが始まった。パンデミックを機に、巡礼路を新型コロナウイルスで蔓延させない「備え」をするのではなく、長距離移動を支援して前述の「現代の徒歩巡礼で共有されてきた経験」を守るような働きかけもまた、「手直し」と特徴づけられるだろう。

V. 観光や環境の客体化を超えて

ここまで、いくつかの民族誌的記述分析をもとに、新型コロナウイルス感染症の流行下における「手直し」とよびうる特徴について、「備え」との差異を示しつつ検討し、観光でも見出されるそうした特徴に光をあてた。未知性と不確実性をはらんだ時空間において、「備え」とは経験せぬ状態を存続させようとする営為であり、「手直し」は経験を起点に次の出来事を引き起こす営為である。「備え」はレジリエンス概念と同様、主体の持続が含まれ、未来に設定した目標を有効にするために現在の行動が決定されるが、「手直し」では、主体の持続へ

の志向からは外れて現前するものの中で行為が修正され再編される。とりわけ後半の参与観察や一次資料に基づく事例の子細に目をやると、備えから手直しへの切り替えではなく、「備え」の上に「手直し」が萌芽する重層的な様相も明らかになった。

本論文の出発点に戻ろう。新型コロナウイルスは、これからも断続的に観光関連産業において不確実性を高めることになるだろう。その根本的な原因とされる環境破壊についてさまざまな指針やマネジメントのあり方を問う議論が観光研究で隆盛している。だが本論文は、新型コロナウイルスに曝露するおそれのある空間での活動にせまる民族誌的研究を起点に、暮らす身体と出かける身体を連続させつつ議論を展開することで、観光の領域だけを切り取っただけではうかがえない諸相も明らかにした。

現在、ポストコロナの観光と環境の新たな関係を探究しなければならないところに私たちは立たされている。環境といえば多くは二酸化炭素の放出量や森林の面積、生物種の多様性といった私たちの身振りから離れた抽象的な領野が想起されがちだが、本論文はそれらから距離を取り、経験の相に接近した。観光と感染症をめぐる制度設計やマネジメントといった高みからの展望を手放して、研究視点の高さを下げる研究視座こそが、行為遂行的に、取りまかれる世界＝環境との関係を紡ぎ直すひとつの方途となるのではないだろうか。

VI. おわりにかえて——「生政治」の対象から外れるツーリズム関連従事者

最後に、上記の二つのツーリズムの事例を足がかりとして、新型コロナウイルス流行下におけるツーリズムならではの課題について補足的に言及しておきたい。それは、旅行者の対応をする人々の保健衛生や療養が後まわしになっている複合的要因である。新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり始めた2020年春、各国政府はその対策として検査と隔離およびロックダウン政策を採用した。これに対して一部の識者たちは、安全の名のもとに行動の自由や人間関係を奪い、生存のみの生に人々を縮減するものと鋭く批判した。たとえば哲学者ジョルジョ・アガンベンは、私たちが生きているのは事実上、「セキュリティ上の理由」と言われているもののために自由を犠牲にし、永続する恐怖やセキュリティが不全な状態にある社会である（Agamben, 2020/2020 高桑訳）と言った。そこでは、感染者の全体的な数量を即物的に管理し、死

ないようにする支配の仕方、すなわち「生政治」が批判されたのだった。よく知られているように「生政治」はミシェル・フーコーの術語で、その統治の対象は「人口」を形成する身体や統計学に基づく社会であり、統治は、主権者の恣意に左右されることなく、自然科学の道理に即して行われることが目指される（Foucault 2004/2008 慎改訳 pp. 20-22）。

しかしながら、北アルプスの事例からは、当事者の意図に拠ることなくツーリズム関連従事者が生政治の対象から外れるさまが認められた。人々が狭い空間に密集しないのが新型コロナウイルス感染症の拡大を防ぐうえで必要であると行政および感染症の専門家からなされた再三のアナウンスメントは、キャンプや山登りの人口を押し上げることになった。しかしテント泊する登山初心者や外出自粛要請によって体力が衰えた人々の高峰への山行志向を喚起し、2021年の山岳遭難件数は増加した。行政や山岳ツーリズム業者ができる遭難対策は、登山者に対する啓発活動のほか、登山道を整備し、バイオトイレを維持管理し、救助活動の拠点となる山小屋の営業を継続することであるが、4か月と時期が限定された山小屋の運営スタッフ希望者は減少傾向にあり、全国から働き手を募らねば運営が危ぶまれる。濃霧が生じやすい山小屋の立地ゆえに窓を開けての換気は容易ではない。こうした専門家が示す指針、雇用環境、地理的条件、新型コロナウイルスが感染しやすいという条件が複雑に絡み合い、山岳ツーリズムにおける働き手は、登山客が持ち運ぶウイルスに曝露しやすく、感染が判明しても搬送されることも病院や自宅で療養することが困難になっている。

他方、サンティアゴ徒歩巡礼の事例では、ロックダウンが敷かれ、巡礼路の宿泊施設が一斉に閉鎖された直後、自宅に戻ることも泊る場所も見つからず、さらには感染しているかもしれない徒歩巡礼者は、巡礼宿や巡礼路愛好会の家に受け入れられた。その背景にはカトリックと結びついた慈善的風土があると読むこともできるが、より正確には、道沿いに固有の薬草が自生しているため、中世より修道院や救護施設においてそれらを用いて病身の巡礼者がケアされてきた歴史があり、今でもサンティアゴ徒歩巡礼を経験し、巡礼路を愛好する人々がいくつかの巡礼宿を運営しているという場所固有の事情があることも重要である。

これらの事情は旅行関連産業という異郷の他者を迎える業態における必然的リスクのように単純に取り扱われるべきことではない。今後の課題として、地理的条件や旅行者を迎え入れる過程でなされる行為の特殊

性、場所への愛着、歴史的背景、ウイルスの病原性の度合いなどがいかに新型コロナウイルスに関する生政治の対象から外れるのか、その過程を多面的かつ丁寧に紐解く必要があると考える¹¹⁾。

付記

本研究のもととなった調査には、2022年度JSPS科研費基盤研究(B)課題番号22H00773「観光における不確実性とリスク：不安と分断に抗する観光実践への理論的展望」（研究代表：市野澤潤平）の助成を受けた。

注

- 1) ここでは深くは立ち入らないが、このことは、財やサービスの品質やリスク、取引の妥当性を客観的基準に照らして診断し、他者へ情報を開示する「監査文化」（春日, 2007; Strathern, 2000）と接点をもつと筆者は考える。
- 2) 門田は次のように述べる。「旅行のために化石燃料を人より多く消費する正当性は何か、またそれによって現地に経済的恩恵を与えとしても、それは経済的強者による権力関係を再生産しているだけではないのか、という大きな問いがそこにある（門田, 2021, p. 20）。
- 3) 同様の問題提起はコロナ禍における料理と食事についての政治学者の中島岳志の論考でも述べられている（中島, 2020）。
- 4) 近年の観光研究におけるレジリエンスの議論の整理については大橋（2020）を参照のこと。
- 5) これに関連する興味深い点として、都市におけるセキュリティ概念の変化にも言及しておきたい。かつて都市を特徴づける要素として、多様性の包含（inclusion）や繁栄があったが、近年は物理的システムの安全性という角度から都市化を考察すべきという主張が盛んになっている（Coward, 2009）。米国の建築家らが考える都市計画でも、建造物や水道、公共交通機関などインフラストラクチャーにおける信頼性や自己修復性、災害時における継続性が重要視される潮流がある。ゲーティッドコミュニティを、資源へのアクセス範囲の制限ないしネットワークの分散というひとつのセキュリティのあり方とみなす議論もある（Evans & Reid 2014, pp. 18-20）。これらのことから、都市計画における「セキュリティ」

概念自体が、危機の回避ではもはやなく、ダメージを受けても最低限の機能を維持への指向へと変化していると言える。

- 6) 長野県では指定山岳に登山する際は、登山計画書の届出が県の条例で義務付けられている。データからは、コロナ禍中の2020年ですら登山者数は33万、2021年には49万人を上回っており、山岳ツーリズムは善戦しているように見える。だが、長野県観光部によると、実際この数字は、山岳アプリ「ヤママップ」が長野県と提携し、ウェブを介した登山届が多く出されたに過ぎず、実際登山者の数は激減したという。
- 7) サンティアゴ巡礼路財団 (Fundación Jacobea) のマネージャー Rosa Vázquez へのインタビューによる (2022年9月17日)。
- 8) 2022年9月の巡礼路参与観察中の巡礼者への聴き取りと、Fundación Jacobeaのウェブ記事による。
- 9) スペインの事例ではよりグローバルな感染流行状況が影響を及ぼし、スペインではコロナ禍と同等のニュアンスでパンデミア *pandemia* とよぶため、前節まで新型コロナウイルス感染症の流行をコロナ禍と記したが、本節ではコロナ禍ではなくパンデミックと表記する。
- 10) この写真は、Fundación Jacobea 編集 *La memoria de los peregrinos II El año. 2020 en el Camino* の表紙に用いられている。
- 11) この点において、生政治の対概念としてアキーユ・ンベンベによって示された「壊死政治 (necropolitics)」(Mbembe, 2008) は部分的には参考になる。壊死政治とは、抵抗や犠牲や恐怖のなかで再編成され、生きながらにして死す者、排除される者が作り出される権力や支配を指す。人種や資本の不平等を批判するンベンベの視点によれば、壊死政治は、殺す権利の行使や自他を区別し「敵」を創出する欲望が作動することによって実施される。生政治と壊死政治の間には、統治のあり方が、前者では物体や数量といった装置によって把握される自然に依拠するのに対し、後者では情動や属性認識のあり方に依拠するという相違点がある。これに対して本論文では、旅行者の対応をする人々が生政治から外れる内実について、一義的な支配や疎外によってではなく、地理的条件や異郷の者を向かい入れるなかで遂行される行為の特殊性、歴史的文脈や愛着、ウイルス感染の病原性の度合いなどが複雑に絡み

合っていることを主張する。

参考文献

- 中島岳志 (2020). 「一汁一菜のコスモロジー——土井善晴論」 筑摩書房編集部『コロナ後の世界』 (pp. 125-141). 筑摩書房.
- 大橋昭一 (2020). 「現代ツーリズム論におけるレジリエンスをめぐる諸論調——レジリエンスの理論的解明をめざして」『観光学』23, 9-19.
- 奥知久・島藺洋介 (2021). 「「立ちすくみ」からの脱却——コロナ禍の介護現場におけるケアと安心をめぐる協働的民族誌の試み」 浜田明範ほか編『新型コロナウイルス感染症と人類学——パンデミックとともに考える』 (pp. 311-339). 水声社.
- 澤野美智子 (2022). 「存在感の薄いコロナと過激なコロナ——アメリカ合衆国オクラホマ州におけるパンデミックのリアリティの構築」『日本文化人類学会第56回大会発表要旨』 日本文化人類学会, 最終閲覧 日2022年9月27日, https://docs.google.com/spreadsheets/d/1qOUruAKtLWaTI3i1vyWtp1l50XuvZig8H2_Bdmlb_Tc/edit#gid=659665344
- 信濃毎日新聞 (2022). 「信州の夏山、試練の第7波 従業員感染で営業自粛が拡大山小屋4か所に」 最終閲覧 日2022年8月23日, <https://www.shinmai.co.jp/news/article/CNTS2022072600098>
- Agamben, G. (2020). *A che punto siamo? L'epidemia come politica*. Quodlibet. [高桑和巳訳 (2020). 「私たちはどこにいるのか? ——政治としてのエビデミック」『現代思想』 青土社.]
- Becken, S., Friedl, H., Stantic, B., Connolly, R. M., & Chen, J. (2021). Climate crisis and flying: Social media analysis traces the rise of "flight shame". *Journal of Sustainable Tourism*. 29(9), 1450-1469.
- Butcher, J. (2021). Debating tourism degrowth post COVID-19. *Annals of Tourism Research*. 89. Retrieved August 30, 2022 from <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.annals.2021.103250>
- Caucci von Saucken, P. (2021). *El Año 2020 en el Camino, La memoria de los peregrinos II El año. 2020 en el Camino* (pp. 13-14). Fundación Jacobea.
- Christakis, N. (2020). *Apollo's Arrow: The Profound and Enduring Impact of Coronavirus on the Way We Live*,

- Little, Brown Spark. [庭田よう子訳 (2021).『疫病と人類知 新型コロナウイルスが私たちにもたらした深遠かつ永続的な影響』講談社.]
- Coward, M. (2009). Network-Centric Violence, Critical Infrastructure and the Urbanisation of Security. *Security Dialogue*, 40, 4-5.
- Evans, B., & Reid, J. (2014). *Resilient life: The art of living dangerously*. John Wiley & Sons.
- Foucault, M. (2004). La Naissance de la biopolitique. *Cours au Collège de France(1978-1979)*. Seuil. [慎改康之訳 (2008).『生政治の誕生』筑摩書房.]
- Frey, N. (1998). *Pilgrim Stories: On and Off the Road to Santiago, Journeys along an Ancient Way in Modern Spain*. University of California Press.
- Fundación Jacobea (2020-2022). El Camino [The way]. Retrieved September 23, 2022, from <https://www.fundacionjacobea.org/page/camino-de-santiago/actualidad-del-camino/>
- Fundación Jacobea (2022). *La memoria de los peregrinos II El año. 2020 en el Camino* [The memory of the pilgrims II 2020 on the Camino], Fundación Jacobea.
- Jones, K. E. et al. (2008). Global Trends in Emerging Infectious Disease. *Nature*, 451, 990-993.
- Keck, F. (2010). *Un monde grippé*. Flammarion. [小林徹訳 (2017).『流感世界——パンデミックは神話か?』水声社.]
- Lew, A. A., & Cheer, J. M. (Eds.). (2017). *Tourism, resilience and sustainability: adapting to social, political and economic change*. Routledge.
- Malinowski, B. (1922). *Argonauts of the Western Pacific*. Routledge & Kegan Paul. [増田義郎訳 (2010).『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』講談社.]
- Mauss, M. (1950). *Sociologie et Anthropologie*. Press Universitaires de France. [有地亨・山口俊夫訳 (1968).『社会学と人類学I II』弘文堂.]
- Mbembe, A. (2008). Necropolitics. Morton, S. & Bygrave, S. (Eds.), *Foucault in an Age of Terror*. (pp. 152-182). Palgrave macmillan.
- Mosquera Leal, M., & Galindo Arranz, F. (2021). El impacto de la prensa en el marketing de destino: el anuncio del Bienio Santo [The impact of the press on destination marketing: the announcement of the Holy Biennium]. *Redmarka. Revista de Marketing Aplicado*, 25(1), 81-96.
- Özden-Schilling, T. (2022). Promising resilience: Systems and survival after forestry's ends. *American Anthropologist*, 124(1), 64-76.
- Ponbo, A. (2021). Reflexiones desde el confinamiento. *La memoria de los peregrinos II El año. 2020 en el Camino* [The memory of the pilgrims II 2020 on the Camino], Fundación Jacobea.
- Rouse, C. (2021). Necropolitics versus Biopolitics: Spatialization, White Privilege, and Visibility during a Pandemic. *Cultural Anthropology*, 36(3), 360-367.
- Strathern, M. (2000). *Audit Cultures*. Routledge.
- The Guardian (2017, August 1). Barcelona anti-tourism activists vandalise bikes and bus. The Guardian Retrieved August, 23, 2022, from <https://www.theguardian.com/world/2017/aug/01/barcelona-anti-tourism-activists-vandalise-bikes-and-bus>
- Vogler, R. (2022). "Revenge and catch-up travel or degrowth? Debating tourism Post COVID-19", *Annals of Tourism Research*, 93(C). Retrieved August 28, 2022 from <https://www.sciencedirect-com.utokyo.idm.oclc.org/science/article/pii/S016073832100150X>
- Williams, A. M., & Baláž, V. (2015). Tourism risk and uncertainty: Theoretical reflections. *Journal of Travel Research*, 54(39), 271-287.